

## 書評

石原孝二・斎藤環編著

『オープンダイアログ 思想と哲学』

(東京大学出版会、2022年)

土屋 陽介

フィンランド・西ラップランド地方で生まれた精神医療のアプローチであるオープンダイアログ(以下、ODと略記)は、本書の編著者の一人でもある斎藤環や森川すいめいら著名な精神科医の精力的な紹介により、近年日本でも急速に注目を集めている。本書はODの理念や実践にある程度精通している読者を念頭に置いて、「オープンダイアログの哲学的・思想的な側面に焦点をあて、オープンダイアログの思想の源流を探るとともに、現代哲学の様々なアプローチとの関係についても考えるもの」(i)である。このため、ODに関する予備知識のない読者は、まずは斎藤の手による入門書『オープンダイアログとは何か』(医学書院、2015年)などに目を通し、その上で本書に進むことを勧めたい。

さて評者は、子どもの哲学(Philosophy for Children: P4C)と呼ばれる哲学対話を用いた教育実践を研究上の専門としている(哲学対話に関する詳細は、本書第9章・第10章も参照)。首都圏の私立中学校を拠点にして、実践家としても10年以上にわたって活動をしている。この意味で評者は、確かにある種の対話教育の専門家であると言えるが、一方で精神医療の分野については全くの門外漢である。このため、ODで行われている対話実践について、前提を十分に共有しないまま文献情報のみに基づいて評価を下したり、自身が取り組んでいる対話実践に強引に引きつけて何事かを理解した気になったりすることは、厳に慎まなければならないと考えている。

このことをあらかじめ断った上で、それでもあえて一つだけ、ODと哲学対話の間の不思議な類似点の存在を本稿では指摘したい。それはすなわち、両者の実践はどちらも、対話を目的達成のための手段としては位置づけておらず、対話することそれ自体を目的として対話を行うことによって、その副産物として効能がもたらされるという

考え方を採用している点である。斎藤によると、「ODは本来、「対話のための対話」を推奨しており、「治すため」や「変えるため」という意図を持って臨むべきではないとされている」(73)。これは「ODのプロセスで起きていることに通底する逆説」(94)の一つであり、治療者が治療という目的を忘れ、ノープランでただ目の前の対話のプロセスに没頭しているときに、はじめて治療がもたらされるということが経験的に知られているのだそうである(93-94)。これに類する見解は、哲学対話を教育に応用するときにもしばしば語られる。たとえば子どもの哲学の創始者の一人であるリップマンは、哲学対話が子どもの思考力の向上や暴力の抑止に大きく貢献すると固く信じていたが、そのような目的を前面に掲げて対話を行うのではなく、あくまでも哲学探究のプロセス自体に直接の価値を置いた対話を繰り返すことによって、その副産物 (spin-off) としてそうした教育効果もたらされるのだと述べている (リップマン『探究の共同体』:179)。

しかし、両実践がともにただただ没頭し専心すべきとする「対話」のあり方それ自体は、両実践の間で隔たりが生じていてもおかしくないはずである。ODにおいては、患者・家族・治療者チームなどが対等な立場でミーティングに参加し、治療に関するすべてのことを(治療者同士のリフレクティブな会話も含めて)オープンに発話し合うことによって、患者を含むその場にいる全員でポリフォニーを響かせることを「対話」と呼んでいるのに対して、哲学対話における「対話」とは、本書で山森も指摘しているように(146)あくまでも哲学的な「探究」を目的とした言語活動であるからだ。実のところ哲学対話においては、対話自体もその実践の最終目的ではありえない。対話は哲学探究のための手段であり、参加者全員がただただ専心すべき対象は、正確に言えば哲学探究(哲学的考察)なのである。このため哲学対話においては、哲学探究(哲学的考察)を真摯に行うために必要とされる要請、たとえば「自分には理解できない他者の意見も注意深く傾聴する」「発話者の属性に関わりなく、いかなる人の発言も吟味の対象として対等に尊重する」「探究を深める

ためお互いに質問を投げかけ合う」「安易に理解できたと思いつむのではなく、わからなさや不確実性に耐えて対話を継続し続ける」といった姿勢が、そこで行われる対話のあり方を規定する。しかし不思議なことに、哲学的な探究を可能にする条件として要求される以上のような対話のあり方は、ODが行おうとする対話のあり方とも結果的に大きく類似するのである。なぜそのような重なり合いが生じるのかは、現在の評者にとっては謎でしかない。しかしこのことを突き詰めて考察することは、「対話とは何か?」という巨大な哲学的問題を解明する上での重要な糸口になるのではないかという予感を評者は抱いている。

以上の意味において、本書は評者にとって「哲学探究のための要請はなぜ理想的な対話の条件を生み出すのか?」という問いを考察するための重要な機会を与えてくれた一冊であった。